熊本保健科学大学
週刊 NEWSLETTER
2022.11.4
第 171号
発行 入試・広報課

# 「抗毒素製剤」シンポに参加して

理事長室から

木下 統晴

夜の２時に目が醒めてしまいました。これだと10時から18時の長丁場で開催されるシンポジウムの途中で眠るのではないかと心配です。シンポジウムの最後が、私の挨拶ですので、余計です。

ところが、熊本に足を運んでもらった最初の演者、厚生労働省課長（国の課長は、製薬企業の社長も遠慮される位の重職です。）からは、人の命を守るために、抗毒素の生産と研究がいかに重要であるか、「火の国熊本の地で」という、熱い火のようなメッセージでした。

目は、ぱっちり、それから、10題の講演が続き、18時まで合計11題、いずれも問題提起や情熱のこもった内容でした。眠ってなどいられません。

熊本のKMバイオロジクスは、日本唯一の抗毒素製造所です。製造も、10年かけて計画して作るなど、ものすごく時間がかかるものもあります。研究・開発は、国立感染症研究所、本学の生物毒素・抗毒素共同研究講座（髙橋先生）が参加されて進められています。

国内生産でなければリスクが高いことはコロナで分かりました。外国に頼らなければいけないのでは、いざという時に間に合いません。抗毒素もそうです。毎年のようにヤマカガシという毒蛇に咬まれて血が止まらず、命に係わる状況になる子供たちがいます。その時は、日本のいくつかの備蓄拠点から抗毒素を配送します。それも24時間以内です。一刻の猶予もありません。その拠点の一つがKMバイオロジクスです。他に聖路加国際病院の一二三先生や日本蛇族学術研究所の堺先生、本学の諸熊先生も365日24時間体制で、緊急時に対応されています。

これは講演のほんの一部の話です。このシンポジウムに集われた国、国立感染研、本学の髙橋先生は、このような抗毒素に真剣に取り組まれ、人命に貢献されています。是非、皆さんはそのことを心に留めてください。本学の髙橋先生の講座で３年本格的に研究を進められたおかげで、抗毒素だけでなく、遺伝子組換え体での製造、嫌気性菌から口腔細菌、腸内細菌、神経毒から認知症、自閉症などにも学科を超えた新たな取り組みが始まります。また、講座開設３年で、本学出身の志多田研究員が破傷風菌ハンター世界一となったことも申し添えます。

## 日本の抗毒素製剤めぐり トップランナー11人講演

生物毒素・抗毒素共同研究講座主催の「日本の抗毒素製剤の必要性を論じる会」が10月21日(金)、本学で開催され、現地56名、Zoom視聴135名の計191名が参加しました。

破傷風やジフテリアの抗毒素が小国町出身の北里柴三郎により開発され、現在では国内で唯一、KMバイオロジクスが製造と品質管理を担うなど、熊本は抗毒素製剤に縁の深い土地であると言えます。本会では、抗毒素製剤の現状や抱えている問題を共有し、医薬品としての将来像を様々な専門家とともに考察することを目的に、行政部門の厚労省や日本医療研究開発機構(AMED)、国家検定機関である国立感染症研究所、製造を担うKMバイオロジクス、毒蛇を供給する 蛇族学術研究所、そして実際に抗毒素製剤を扱う医療現場と抗毒素製剤を用いて実験を行う大学から講演者11名が招聘されました。

国内の抗毒素について講演する髙橋元秀特命教授

参加者の所属も多岐にわたる中、熱のこもった講演に応えるように質疑応答やフリーディスカッションが活発に行われました。

（生物毒素・抗毒素共同研究講座共同研究員 田上友貴）

# 「志高くチャレンジし続けて」

**「アカデミックスキルⅡ」川口研究科長が基調講義**

看護学科初年次生を対象とした「アカデミックスキルⅡ」（第５回授業）の基調講義が10月27日（木）、50周年記念館で行われ、川口辰哉研究科長が「キャリアパスを見据える」というテーマで、医療人としての目標の据え方や考え方などを語りました。

医師でもある川口研究科長は、より専門性を追求するために大学院へ進学すると、その後、研究の魅力に引かれ米国にも留学しました。講義では、決断の連続だったという若い頃からの体験談を紹介。吉田松陰の「志を立てて以て万事の源となす」という言葉を引き合いに出し、「皆さんのキャリアパスはこれからまだまだ深まっていく道の途中。常に志高くチャレンジし続け、人生に深みをもたせていってほしい」と話しました。

また、「プロフェッショナルへとつながる第一歩」がこのアカデミックスキルの講義であるとも語り、「一見専門性のないように思える事柄でも、どうせやるならものにしてやるんだという精神で、何事にも挑戦してほしい」と締めくくりました。

（アカデミックスキル支援センター　松尾健志郎）

看護学科の初年次生を前に講義する川口研究科長

マイ授業

## 「精神障害領域作業療法」

**リハビリテーション学科生活機能療法学専攻　吉村　友希講師**

### 「心の病気」ネガティブイメージ払拭

作業療法には、体に障害をお持ちの方を対象とした身体障害領域の作業療法、心に障害をお持ちの方を対象とした精神障害領域の作業療法などがあります。今回は、「精神障害領域作業療法」の授業について紹介します。

近年、心の病気をお持ちの方が増加しています。しかし、学生たちにとって、心の病気は、「奥が深くて難しい」、「突然暴れ出しそうで怖い」などのネガティブなイメージがあるようです。ネガティブなイメージを払拭できないまま精神科病院での実習を行うと、学生たちは、患者さんにどのように対応してよいのか分からず困惑したまま、積極的に行動できません。また、そのような態度では、学生たちにとっても患者さんにとっても実りのある有意義な体験につながらないということにもなります。

そのため、授業では学生たちの精神障害者に対するネガティブなイメージを払拭し、積極的な行動に結びつけるための取り組みを行っています。具体的には、事例シナリオを用いて精神疾患を有した事例の症状や全体像、問題点・利点などを理解すること、作業療法士が精神疾患を有した患者さんに関わる評価場面や治療場面の動画を視聴し、実際に学生たちもその動画を真似て実演することを行っています。その結果、学生たちの精神障害者に対するイメージはポジティブに変化し、実習で必要となるスキルも身についた状態となりました。授業での取り組みが実習での積極的な行動に結びついたかどうかの効果は検証できていませんが、おそらく、有意義な実習体験につながっているのではないかと信じています。

作業遂行能力評価を実演する学生たち

私の部屋でランチを

# 「失敗恐れず何事も積極的に」

**古閑　陽一 特命副学長**

図書館主催「私の部屋でランチを」が10月27日(木)にキャンパステラスとサテライト中継教室(1500講義室M)及びオンラインで開催されました。58回目の今回は、熊本県庁に入庁して以来40年もの間、数々の役職を歴任してきた古閑陽一特命副学長が「県って何をやっているの？　楽しいの？」と題して話しました。

冒頭、双子の娘が共に本学の看護学科卒業生で、本学との最初の繋がりも「親」の立場からであったことを紹介し、会場を沸かせました。この後、自身のキャリアをさかのぼりながら、県民の健康福祉全般に関わりつつ、KMバイオロジクスの誕生や熊本地震で災害救助にもあたった健康福祉部長時代、日本一の水準を目指し英語教育やICT教育を推進してきた教育長時代に言及。県庁マン時代は「一言で言うと楽しかった」ことや、これまで保健と教育には非常に縁があったことを明かしました。

また、かつての上司だった蒲島郁夫知事の「皿を割ることを恐れるな」「皿をたくさん洗う人は皿も割るが、それを恐れずに挑戦することが大切」という言葉を紹介し、「今後も何事にもチャレンジし、今まで培った教育、保健医療分野での経験を基に、本学の一員として何事も積極的に取り組んでいきたい」と思いを語りました。(アカデミックスキル支援センター・松尾健志郎)

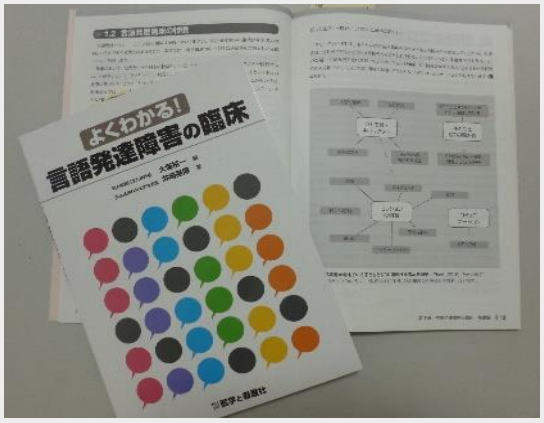
## 『よくわかる！　言語発達障害の臨床』

**井﨑基博著・大塚裕一編（医学と看護社）**

リハビリテーション学科言語聴覚学専攻の大塚裕一教授と井﨑基博准教授＝**顔写真**＝が、小児領域の言語発達障害に対応した教科書『よくわかる！　言語発達障害の臨床』（医学と看護社）を上梓しました。

言語聴覚士（ST）を目指す学生や現場で奮闘する若いSTに向けた一冊。大塚教授が「一目で内容がわかるように」目次立て等の編集全般でアドバイスし、小児領域の言語発達障害を専門とする井﨑准教授が執筆にあたりました。井﨑准教授によると、「ことばの遅れにかかわる自閉症や知的障害に関する教科書は何種類もありますが、『ことばの遅れ』に特化した教科書は少ない」ということです。

基礎編と応用編の２部構成。特に応用編では、現場での経験をもとに子どもの言語年齢に応じた指導法を細かく説明しています。また、井﨑准教授がこだわる絵本を取り入れた療法も随所で紹介されています。（B５判、96ページ、3,600円＋税）




## 銀杏アラカルト

**◆令和５年度入試始まる**　総合型選抜が10月22日（土）に本学で行われました。今年の受験者数は募集定員20人に対して書類選考を通過した58人。受験生は午前中に筆記試験として小論文、午後は個人面接とプレゼンテーションに臨みました。当日は天候にも恵まれ、滞りなく無事終了いたしました。今後の年内入試は、来月５日（土）、学部社会人選抜、助産別科推薦入試、大学院の推薦・社会人選抜Ⅰ。同19日（土）には、学部の学校推薦型選抜（指定校・公募）、12月３日（土）には、助産別科の一般選抜が実施されます。

（入試・広報課）

寄稿

## 異動から５か月　学生の個性活かし就活支援

平川 文丈 就職・実習支援課長

就職・実習支援課に異動して５ヵ月が過ぎた。この課では、学生たちの就職支援と実習支援を担っている。前者においては、履歴書や論作文の添削、模擬面接等、年間4,000件を超えるオーダーを受け、これを７名のスタッフで対応する。各学科の就職戦線ピーク時には、スタッフが身を粉にしてペンを執る。また、本番さながらの模擬面接を行う。これまで改良に改良を重ねながら構築された支援体制であり、携わってきた関係者の労に敬意を払いたい。翻って、支援の在り方がこのままでよいのか、本当に学生たちの力になっているのか。あるいは、学生に寄り添うことは絶対だが、先回りし過ぎた支援になっていないだろうか。そんなことを考えさせられる毎日でもあった。

このたび、当課では就職支援を行う際の方針を掲げた。「学生が求めていることに真摯に向き合い、学生が求めていることを的確に捉えて支援する」というものである。また、「学生の個性を活かす」、「学生の独自性を引き出す」ことを軸にした支援を展開する。私たちは決して就職代行業を担っている訳ではない。大学職員として、教育の一環として支援を提供していく必要があるだろう。これらを課全体の共通認識として形成し、取り組んでいくことにした。

当課スタッフは日々、パソコン画面や出力された紙の向こうにある学生たちの顔を思い浮かべながら、履歴書や論作文と格闘している。模擬面接では顔を突き合わせて、マンツーマンで助言する。本稿をお読みいただいている学生諸君、教職員のみなさんにも、スタッフが奮闘する姿を想像していただければ幸いである。

## 私のお薦め記事

（このコーナーはDive! LSP１年生が担当しました）

総合型選抜で入学した1年次生が、日々の新聞や雑誌などから気になる記事をピックアップし、毎週紹介します。これは、Dive! LSP と銘打った教育プログラムの一環です。

### 重度・高齢者 移行難しく　障害者の施設退所　「地域生活」見据え支援も

（2022年10月17日付熊本日日新聞３面）

**概要**

記事では精神障害者が施設入所時から施設を出た後の生活を想定し支援する川崎市の入所施設「桜の風」を紹介している。わが国では、年を重ねるごとに重度の患者の地域移行が困難になっている。桜の風では、患者の特徴に合わせた地道な工夫を行っている。国連障害者権利委員会からの勧告を理解し、対策をとることが地域移行のカギとなる。

（リハビリテーション学科理学療法学専攻・水野雄心）

**コメント**

食事を美味しく食べられたり、好きなものを自由に買ったりできる喜びは、その人の生活の質を上げることができる。「桜の風」では、移行に向けたさまざまな地道な工夫を重ねられている。個人に合わせた対策を考え、一緒に行うことが地域社会で暮らしていくために必要な関わりだと思う。少しでも自分に自信を持ち、地域生活になじめるような対策を模索することが大切だと考えた。（看護学科・坂上由夏）

## インフォメーション

| 週間行事予定（11月 5日～11月11日） | |
|---|---|
| 11 / 5（土） | 学部特別選抜（社会人）、助産別科推薦入試、大学院推薦入試・社会人選抜Ⅰ |